

2016年5月26日

無音の叫び声(農民詩人^{きむらみちお}木村廸夫は語る) ^{はらむらまさき}原村政樹編著 を読んで

この本を、全く同じ題名のドキュメンタリー映画を見終わってから、その小映画館のロビーで購入した。編著者はその映画の監督でもある。

私は文学的な詩の世界に疎く、農民的な東北の詩人といえば宮沢賢治くらいしか知らなかった。木村廸夫が第二の父親と慕う、同郷でもある山形出身の農民詩人、真壁仁の名さえ忘れていた。本書にも紹介されている、真壁の代表的な作品である「峠」という詩は、確かに遠い昔に読んだことがあるような気がするが、その程度の知識である。

現代を代表する農民詩人と称される木村廸夫の存在は、映画を通して初めて知った。この本は映画のシナリオ的な存在でもありうるし、映画を見る前に一度読んでおくべきだった。その方が、映画を深く味わうことができたと思う。

この本は、木村廸夫の生い立ちからごく最近までの足跡と、その時々を語る木村自身へインタビュー、そして、十代半ばからこれまでの木村廸夫の代表的な詩の数々と、彼に影響を与えた人々の若干の詩で構成されている。

文学的な詩はいわゆる歌詞とは違い、その表現が私にとって難解な部分もあり、一度読んだだけではなかなか理解できない。原村自身が説くように、詩は何度も声を出して読むとよい。詩に疎い私でさえ、音読することによって、何かを体感するように、体の中にすっと入ってくるような気がするから不思議だ。

木村廸夫の詩は山形県上山市牧野の風土から生まれた。インタビューの中で、彼はこう語っている。「俺はよ、ただ百姓になってこのまま埋もれてしまいたくないという思いがあったから。虫けらのように、言葉を持たずに、表現活動もしないで、土に埋もれて死ぬのは嫌だと思ったから。だから自分は虫けらのような生き方でなくて、物を見、発言のできる百姓にならなければならないと、そのためにも詩を書いていこうという思いもあったから。」この思いの強さが木村の原点であると思う。

80歳をこえる今日まで、その不屈の精神を貫く強さは色褪せないし、つねにみずみずしい感性を持ち続けている。研ぎ澄まされた感性と全てを昇華しうるタフな精神力とが絶妙に調和しないと、優れた詩は生まれえないように思う。

この本は、詩作に多くの情熱を注ぎ、骨太な人生を歩んできた木村廸夫の人生そのものが語られている。その中でも特に二つのエピソードが印象的だった。

一つ目は、木村の祖母、つゑが二人の息子を戦争で失ったことに対する深い嘆きである。木村の「建国記念日」の詩の一部を引用する。

にほんのひのまる
なであかい
かえらぬ
おらがむすこの
ちであかい

わが家の軒先に日の丸の旗が立たなくなってから六十四年　そう　この国日本が敗れたその年から　ぼくの家では　日の丸の旗を見ることはなくなった　死んで久しい祖母の決意であり　遺言であった　・・・・（以上引用終了）

二つ目は、木村が64歳の時に胃がんを患い、手術をしてから以後3年間うつ病にかかり通院していたというエピソードである。病というものは、木村のような強い精神力をもった人間でさえ、心に多くのダメージを与え蝕む。逆説的にいうと木村廸夫の人間らしいエピソードが印象に残った。

『無音の叫び』とは、一体、なんだろうか。

人は食のみにある。食が満足でなければ、すべての動物と同じく、人は生きていけない。農は食を生み出す、人の原点ともいえる仕事である。農というものを軽んずる社会は、やがては衰退への道をたどるに違いない。

木村は国の米の減反政策を「心の冷害」と表現した。実りの秋を豊饒の海と感じていた農民の心象風景が、まったく一転してしまったのだ。農民の「心の冷害」は、米作りの意欲をなくさせ、農に携わる人々に大きな不安を与え、かつての村社会は疲弊しつつある。

農というものに真摯に向き合ってきた人々の、現実に対する行き場のない嘆きを『無音の叫び』というのだろうか。